

言葉の発達と自己表現力

－ 対話的ブックトーク －

清 水 美智子

摘要： 子ども達が躊躇することなく会話ができるようになるにはどのような実践がよいかを考えた。そこで対話型のブックトークを試みることにした。子ども達が構えず気楽に話す力を育むには、身近な絵本を媒介物に活用すれば話しやすくなるのではないか。そこで、話し合うテーマを決め、テーマに関連した絵本を数冊選び、絵本を媒介として話し合う「対話的ブックトーク」の手法を考案し、幼稚園や小学校において実践を継続してきた。そこから見えてきたのが小学生中学年期からの「話さない」「話せない」の問題点が、乳児期における言葉の習得の問題、幼児期における言葉の活用の問題点であった。

対話的ブックトークは、ルールに守られ自由に発言できる環境の中で、友達の発言から聞き取る力が付き、聞き取った事柄を考える力を育くみ、自分の考えを言葉に整えて発言する力をつける。

聞く力と考える力と話す力の育みがこの手法の狙いである。

キーワード 対話的ブックトーク 言葉の発達 会話

I はじめに

昨今、10歳前後から子どもがあまり話さなくなっているように感じる。友達同士のふざけ合いなどのお喋りは限りなく続くが、話さなければいけないときの受け応えが上手くできない傾向が見受けられる。知っていることを伝えるのではなく、自分の思いや考えを言葉にして伝えることが上手くできない。乳幼児期からの言葉の習得過程に何か問題があるのだとしたら、子どもを取り巻く言語環境を調べることによって問題点が見えてくるのではないかとの思いに至った。

そこで本研究において、10歳前後からの子ども達の話せない原因がどこにあるかを探り、言葉の発達と表現力の関係性について考えてみる。

先進国は文明機器の発達によって会話不要の社会を作り上げてきた。買い物をするにも乗り物を利用するときもすべてカードで精算され言葉を交わす必要のない時代になった。子どものみではなく大人たち自身の会話力がすでに落魄し始めている状況にある。子どもが大人達の会話を聞きながら言葉の使い方を学ぶという現状がおぼつかなくなっている。

映像文化の発達によって子ども達は生まれた時から視覚からの理解脳を発達させてきている。その視点からも、言語による表現力の遅滞は仕方のない現象と言えるのかもしれない。

そこで、話せなくなっている原因が生活様式からきているものなのか。それとも乳幼児期における語彙の習得不足によるものか。その点においても調べてみる必要があると思われる。そこで、10歳前後から現れる「話せない」原因がどこにあるか。幼稚園児から小学6年生までを対象に、対話的ブックトークの

実践から問題点を探ってみる。

本研究は、名古屋経営短期大学の紀要に発表した、第 53 号「子どもが育つ絵本の活用のあり方」—子どもの聞く力・考える力・話す力の育みを求めて—。名古屋経営短期大学紀要第 54 号「子どもの理解能力を育む絵本の役割—その継続性と発展性—」。子ども学研究論集 第 6 号「乳幼児期の理解能力—教育教材の効果—からの継続課題である

II 研究の目的

子ども達の理解力が年齢に即した成長をしているかどうか、対話的ブックトークの授業への参加の現状から、話さない話せないことの根源に言葉の問題がかかわっていないかどうかを探る。そこから他者の発言の意図を的確に聞き取り・聞いた事柄を理解して応じる力の発達を考察する。

III 研究方法

小学校に隣接する幼稚園児の年長クラスから継続し小学生において対話的ブックトークを実践してきたデータをもとに、子ども達の語彙力や表現力の実態を把握し、さらに 3・4年生の状況、5・6年生の状況などから、年齢に即した会話力が培われているかどうか実態を調査する。

- 1、 幼稚園・保育園での自由性のある環境の中で身につけた社会性やコミュニケーション力が、小学校での椅子に座って授業を受けるという環境の中で変化が起こっているかどうか。
- 2、 3・4年生における語彙量と授業への参加態度との関係性。
- 3、 5・6年生における語彙力と発言力の関係性。

(1) 対話的ブックトークとは

ブックトークには「ブックトーク」と「対話的ブックトーク」とがある。

「ブックトーク」はテーマを設定し、テーマに関連した本を紹介し、その中から子どもが読みたいと思った本を借り、自ら読む手法であり読書への啓発手段の一つである。よって、ブックトークは文章の読める子どもが対象となる。

「対話的ブックトーク」はテーマを設定し、テーマに関連した絵本を用意し、それらの絵本を媒介として子ども達と話し合う手法を言う。よって対話的ブックトークは文字の読めない年齢期から、自ら文章を読解できる年齢期までが対象であり上限がない。さらに、対話的ブックトークはテーマの追求と話し合いが最終の目的ではなく、話し合う中で子どもの聞き取る力と、聞き取った事柄を自分なりに考え、考えついた事柄を言葉に整えて伝える力を引き出すことを目的としている。この手法は筆者が 31 年間の読書相談員の業務の中で、子どもからの質問に応じたり、疑問を子どもと共に考える中から、子どもの聞く力・考える力・話す力を引き出す手法として開発した筆者自身のオリジナルである。

対話的ブックトークにおいては物語絵本も知識絵本もテーマとして活用することができる。

集団教育の中での対話的ブックトークは、絵本を媒介としてテーマを共有し話し合うことから、幼稚園・保育園などでも実践しており、先生方から「人の話を聞こうとする力や人の話を参考にして自らの考えを深める力が育って来ている」との報告もある。

対話的ブックトークは子ども達の好奇心や理解力に合わせたテーマの設定ができる。

視覚文化の中で育った子ども達にとって絵本を媒介とした対話的ブックトークは解りやすく興味が持ち

やすい状況を作り出す。よってこの手法は子ども達を緊張感から解き放つとともに好奇心を育む効果があると考えられる。

(2) 「対話的ブックトーク」の場の設定

対話的ブックトークを展開するにあたって、子ども達が失言を恐れずに、安心してのびのびと発言できる場を設定する。

1) 具体的な留意点として、次の事項を子ども達に意識させる

- ① 疑問に思うことがあったら手を挙げて質問する。
- ② 誰かが話している間はその人の話を注意深く聞く。
- ③ 知っていることを答えるのみではなく、自分で考えたこと気づいたことも発言するように努める。
- ④ 人の話を参考にして、自分の考えを深めることも大切にする。
- ⑤ 一生懸命に考えたことは自信がなくても勇気を持って発言するように努める。
- ⑥ 他の人の意見を茶化したりふざけて笑ったりしない。
- ⑦ 自分の考えを他の人が理解できるようにことばを整えて話す努力をする。

これらのルールによって子ども達是对話的ブックトークにおいては、間違った発言をしても誰からも指摘されることも笑われることもないことを知る。さらに、このルールから安心感や、話す勇気が育ちコミュニケーションのマナーをも身に付けることになる。

2)、 テーマの設定と絵本の選択

絵本にはあらゆる分野があらゆるグレードで用意されている。物語絵本からは精神性や社会性などの人間関係が、知識絵本からは自然や社会の成り立ちなどがテーマとして設定できる。

視覚文化の中で育っている子どもにとって、絵本という視覚からの情報の提供は解りやすさという点において目的達成のために効果的である。

また、発達段階に即したテーマの設定においては、興味や関心がテーマに向かうような文体や挿絵の絵本が用意でき、さまざまな視点からの発想や意見に対応する絵本を用意することができる。指導者はテーマに固執せず常に子どもの発言を否定せず受け止め、共感し、自己有能感を導き出すよう心掛ける。

3)、 指導者のコーディネイトの必要性

- ① 一人一人が意見を出しやすいように、安心して話せる場の雰囲気を配慮する。
- ② 子どものことばの受け止め方・応じ方など注意深く配慮する。
- ③ 集団での秩序を常に意識させる。
- ④ 子ども達の意識がテーマに向かうように絵本を効果的に活用する。
- ⑤ 方向性が整ってきた後は、子ども達の自発的な発言に話し合いを委ねる。
- ⑥ 質問や発言がない場合は絵本から、話題のきっかけを提供する。
- ⑦ 指導者は子どもからの質問には答えず、子ども達が全員で考えるように促す。
- ⑧ 話し合いがテーマから逸脱し、ふざけた発言に発展したときには話題を戻す方向に導く。
- ⑨ 自ら思いついた考えを不安げに発言する子や、考えを順序だてて話すことができないときには、子どもの発言から意図するところを丁寧に聞き取り、意見を具体的に整えなおし復唱する。整えられた指導者の話し方を参考に話し方を学べるように考慮する。
- ⑩ 発言がからかわれたときは、発言者が萎縮しないように瞬時にフォローする。

- ⑩ 常に意見を肯定的に受け止め、子どもが安心して発言できるよう心がける。

4)、 対話的ブックトークの意図と価値

- ① 科学的な見方や考え方の意識を高め、視野を広げ、知的好奇心を育み、発見する喜びや感動する心を育てる。
- ② 絵本からの視覚的な情報は子どもがテーマに近づく導き手となる。
- ③ テーマを段階的に深める継続的なプログラムは、子どもの発達に即した内容の発展が可能となる。
- ④ 物語絵本や知識絵本を媒介とした子ども達の話し合いは、情報が体験と重なりやすく日常的に五感から体得した情報が脳に記憶され蓄積されていく。
- ⑤ さまざまなテーマでの話し合いから記憶された多くの情報は、考えを導き出すときにつながり合っ
て筋道を整える力となる。
- ⑥ 意見の共有は自分の考えを深めるヒントとなる。
- ⑦ 問題の解明に向かったの話の進展は、人の話を理解し自分の意見を伝える会話力の訓練となる。

IV 対話的ブックトークの事例

1、幼稚園での事例

年長児の対話的ブックトーク テーマ「ルールとマナー」

扱った絵本『デイビッドがっこうへいく』・『デイビッドがやっちゃった』

毎月1度 幼稚園年長クラス30人を対象に対話的ブックトークを実践している幼稚園での事例。

3学期の最後、4月には小学校に入学する子どもたちに「ルールとマナー」をテーマにした対話的ブックトーク実践している。

最初に全文を読み、その後で「遅刻をしてはいけません」。「順番を待ちなさい」の項で、「どうしてでしょう？」と問いかけると、「先生に叱られるのから」と答える。「どうして先生は注意をするのでしょうか？」とさらに問いかけると、子ども自身が「迷惑になるから」「友達がいやな気分になるから」との思いに至る。

「はだかんぼうで外に行ってはいけません」「食べもので遊んではいけません」の項では「お母さんが怒るから」と答える。「どうして叱るのでしょうか？」と問いかける。

すると「風邪を引くから・恥ずかしいから」「もったいないから」と、その理由に自ら気付き発言するようになる。年長児においても時間をかけて話し合っていくと自分の考えを、自ら導き出し発言できるようになっていくことが確認できる。

* 知っていることから考えて話すことへ、

当初は知っていることやとっさに思いついたことを発言するのみでどの子もよく発言をする。しかし、考えて話すことや話し合いのやり取りの中で、テーマを膨らませ話し合うことは幼い子どもには難しい。子ども達の意見や疑問を指導者が答えてしまわずに子ども達に考えさせていくと、「なにを話そうか?」「どのように話そうか?」と考え始める。



図1『デイビッド
がっこうへいく』



図2『デイビッド
がやっちゃった!』

＊自分の考えの表し方

日常あまり話さない子や腕白な子どもの中には、話し方が不器用であっても、テーマに即している意見や、ユニークな発想を持っている子がいる。また、少し問題を抱えている子はただ話したい気持ちから手をあげ、当てられないといらだち始める。そのとき話の内容を肯定的に受け止め、整理し、丁寧に聞いていくとしたいに待てるようになり、さらにただ待つだけではなく考えながら待てるようになる。集団の中での一対一での丁寧なかかわりは友達の前で認められたという満足感を与え、考えに集中できるようになってくる。

＊対話的ブックトークの意図への到達

毎回よく手を挙げて発言する5歳の女兒があるときまったく手を上げなかった。終了後に「どうしたの?」と訊ねると「今日はお友達がどんなことを話すか、聞いていたかったから」と答えた。この子は自分の知っていること・考えついたことを元気よく発言してきた。これまでは問いかけと自分の意見との一問一答であったが、この日、他者の話を注意深く聞き、参考になる意見を取り入れ自分の考えを深めていく手法に気づいたのではなかろうか。この発言は対話的ブックトーク本来の意図に踏み出した証と考える。

＊ 集団でのテーマの追究から、自己での発展性への成長

テーマ「野山を歩く」を話し合っていたとき、5歳の女兒が手をあげ「キャンプに行ったとき、臭いを吸って(嗅覚で感じ取って)くるのを忘れちゃった」と発言した。この子は図書館での対話的ブックトークに参加する前に家族でキャンプ行った体験からの発言であった。この子はいつどこにいても五感を働かせ、自発的に科学する力がつき始めている。

＊ 5歳の男児が幼稚園で対話的ブックトークを体験したの帰り道に、友達とその日に扱ったテーマについて追究していたとの報告がある。また、テーマとつながりのあるテレビ番組を見ながら自分の考えをひろげ、親に話しかける様子なども報告されている。

以上、幼稚園での実践記録から対話的ブックトークが、5歳児にも自ら「聞く力」「思考する力」「話す力」を助長させることが確認できる。このように絵本を媒介とした話し合いからの対話的ブックトークは、幼児期の子どものコミュニケーション力を育む手だての一つとして効果的であるとともに自ら学ぶ楽しさをも習得すると思われる。

2、 小学校での事例

知識絵本からのアプローチは知る喜び、学ぶ面白さを育む。

(1) 1・2年生での実践例 テーマ「危険から身を守る」

【テーマの意図】

生きものたちが危険から身を守る手立てとしてどのような身体の仕組みを持っているか、人はどのような体の仕組みを持っているか。



図3 『ほねはおれますくだけです』



図4 『虫のかくれんぼ』

扱った絵本

『ほねは おれます いただけます』 童心社

『虫のかくれんぼ』 福音館

『なみだくんありがとう』 あかね書房

『くらべる図鑑 6 しらせる』 フレーベル館

最初に、対話的ブックトークへの参加の仕方とルールの説明をする。始まりは場の雰囲気を和ませるために、絵本の表紙を順番に見せていく。ここでの反応からクラスの雰囲気や子どもの様子をつかむように心がける。



図5 『なみだくん
ありがとう』



図6 『くらべる図鑑
6 しらせる』

子ども達にどのように答えたらよいかのマニュアルとして「カブトムシは硬い殻で体を被って身を守っているね」と話しかけ、どのように発言したらよいかを示し、『ほねは おれます いただけます』の、カブトムシやカニの描かれたページを開く。

すると「そういう虫を、甲虫って言うんだよ」と答えた子がいる。

そこで、この年齢期ではどのレベルでの話し合いが成り立つかを考え、対話的ブックトークの約束を説明して始める。

「今から、絵本を見ながら話し合っていきますが、話したいことや気づいたことがあったら手を挙げて、当てられたら大きな声で話してくださいね。そして、お友達が話している間はお友達の話を真剣に聞こうね」と、再度約束を確認しておく。

タコの絵のページで「タコはどのようにして敵から身を守りますか」と切り出すと、数人の子が手を挙げるが、1人の子が勝手に「墨を吐いて逃げる」と、話し出す。

「ほらほら、手を挙げて当てられたら話す。だったでしょ」と、また約束を確認し、挙手した子を当てると、「暴れて逃げる」と発言する。この発言からどれほどの意見が出るかを探るために「どのように？」と投げかけてみる。

約束の守れている子を指すと「他の足でぶん殴る」と言う。

「なるほど、足が8本あるものね」。

すかさず他の子が「ヌルヌルしているから すっぼぬける」と発言する。手を挙げての発言ではなかったが流れを止めたくなかったので、そのまま「まあ、さわったことがあるの？」と応じる。

「うん、タコ！」との発言を待って、「手を挙げてから言おうね」と付け加える。

「カブトムシは硬い殻で、イカやタコは墨を吐いたり、クニャクニャ・ヌルヌルした体で逃げて身を守る。では人間はどのように体を守っているでしょうか」と、「ほねは おれます いただけます」の頭がい骨やあばら骨の奥に内臓が描かれているページを開く。

「わー、がい骨」と、一斉にざわめきだす。

「そう、骨です」。

子ども達に自分の頭をコンコンと叩かせて「頭がい骨はどうしてこんなに硬いのでしょうかね」。

「はい、頭を守る」。(約束が守れている)

「そうね、頭がい骨は頭の中にある脳を守っています。このあばら骨では心臓や肺などを守っています。では、目はなにで守っていますか」と言いながら、『なみだくん ありがとう』を見せる。

「まぶた」。「他には？」。

「まつげ」。「そうですね。まぶたやまつげで守っていますね。では目にゴミが入ったらどうしましょう」。

「はい、水で洗う」・「先生にとってもらう」。

「はい、泣く」前のほうに座っていた子が絵を見ながら発言する。

「そうですね。泣くと？」。

「はい、分かった。涙」。

「そうですね。涙が何をしますか？」。

「…」。「涙と一緒に？」。

「はい、はい、ゴミが出る」。「ゴミで目が傷つかないように涙で目を守っています」矢継ぎ早に、子どもの意見を拾っていくが、このとき黙って手を挙げている子に「はい、手を挙げている〇〇ちゃん」と、挙手を強調しながら当てると、勝手にしゃべりだしている子も手を挙げて当ててもらおうことを思い出し手を挙げ出す。

「涙で洗う」。「そうですね。では、煙が目に入ってしまったらどうしよう」

意見が出ないので、次のページを開き、「煙も目によくはないものだから、やっぱり涙で目を洗うんですって。ペットが死んでしまったり、大きな犬に追いかけられたりしたとき、どうして涙が出るんでしょう？」と、問いかける。

「悲しいから」・「怖いから」と、手を挙げることを忘れて答える。そのまま受け止めて、発言した子に手を挙げるしぐさで約束を促す。

「そうですね、では、このときの涙は何を洗い流うんでしょう」。

「…」。

子どもたち自身で悲しさや怖さの気持ちを洗い流すことに気づいてほしいとの思いから、「難しいですね～。何を洗い流しているのか、お友達と話し合ってみてくださいね」と『なみだくんありがとう』を終わり。

次に、『くらべる図鑑 6 しらせる』の遮断機のページを開き（遮断機の上に描かれているオオスズメバチの絵を隠しておく）「私たち人間は体のしくみで体を守るだけではなくて、危険から体を守るための道具（遮断機を指差し）や標識を使って危険を知らせ、事故にあわないように体を守っています。これはなんという名前でしょうか」と、問いかける。

「遮断機」。また、手を挙げないで発言、手を挙げさせてから再度発言をさせる。

「何から」。「はい、電車から」。「そうですね。最初に赤いランプが点いたり消えたりしながら…」と言いながら少し間を取ると、待ちきれない様子で手を挙げ、「はい、カンカンカンと鳴る」と発言する。

そこで、赤色灯が点滅して視覚に訴え危険を知らせ、カンカンと鳴る音は聴覚に危険を知らせることを確認させ、黄色と黒の縞に塗ってある遮断機は直接、人が進入するのを防ぎ、事故が起こらないよう対策がとられていることを話し、かくしてあったオオスズメバチの絵を見せる。

「黄色と黒は注意のマークです。大スズメバチに刺されると死んでしまうこともあるんですって。ですからこの模様を使って、近づく危険ですよと知らせるために、注意のマークを黄色と黒の縞模様にしたと書いてあります。黄色と黒の標識を探して、どんなところに使われているか確かめてみてくださいね」と言うところで、時間となり対話的ブックトークを終了した。

* 1年生の一学期の対話的ブックトークでは、人の話が終わるのを待って発言をすることができる。しかし、人の話の内容を注意深く聞くという位置には至っていない。対話的ブックトークを繰り返し体験

させる中で次第にできるようになっていくと思われる。

- * 対話的ブックトークは一ヶ月に一度のペースで実施している。それぞれのクラスでそれぞれの意見が出るが、まだ知っていることを言うだけで、自分でイメージしたことや子ども達の間でのやり取りの中でテーマを膨らませる話し合いには至っていない。友達の見解に自分の意見を重ねていく話し合いが成り立つには長い時間を要する。
- * 対話的ブックトークから見えてくる低学年の子どもは、どの子も聞きたがりやで話したがりやであることが伝わってくる。

(2) 3・4年生での実践例 テーマ「空気の不思議」

【テーマの意図】

身体のしくみと生きていることの実感を確かめる。

扱った絵本

- 1、『からっぽだっていっぱい』 農文協
- 2、『あかしろ あおいち』 童心社
- 3、『いきをするのはなぜだろう』 偕成社
- 4、『宇宙と地球と日本列島』 教育社

最初に『からっぽだっていっぱい』のあらすじを説明し、空気の働きを確かめながら、「息を吸うと、どこに入っていきますか」と、ブルーに描かれた空気が猫の口に吸い込まれていくページを開き問いかける。

6人前後の子が手を挙げ、「口の中」と答える。

すかさず「口から？」と、問いかけると、

「肺」。「肺から？」矢継ぎ早に問いかける。

「…」(心臓と血管と迷っている様子)

「ほら、勇気を出して！」と促す。女の子がおそろおそろ手を挙げて「血管」と発言する。

「そうですね。では、血管から?」。「心臓」。「心臓から?…」。「…」。また止まってしまう。

「気楽に考えてね。間違ってもいいのよ。間違ふことは決して恥ずかしいことではないですからね」と促し、勇気を出して手を挙げた男の子を「はい。どうぞ」と指名する。

「体の隅々」。「そうですね。体の隅々へ行って何をするのでしょうか」

「…」無言のまま顔を見合っている。

『あかしろあおいち』の手足や頭に赤い血管が描かれているページを開き「走ったり考えたりする力になっているんですって」(再度、『からっぽだっていっぱい』の、ネコが深呼吸しているページを見せ)

「人が体の中に取り込んでいる空気は酸素の多い空気。では、吐いているのは？」

「二酸化炭素」。「そうですね。吸い込んだ空気が体の中でどのような働きをして、酸素の多い空気が二酸化炭素の多い空気になるのでしょうか」

「…、…、…」シーンとしている。「判りませんね。そこを皆さんと話し合いたくて、このテーマにした



図7 『からっぽだっていっぱい』



図8 『あかしろあおいち』



図9 『いきをするのはなぜだろう』



図10 『宇宙と地球と日本列島』

「んですよ」と、主題を認識させ、『あかしろあおいち』の表紙を示し「この中央の丸い絵は血管の断面図です。黄色は栄養。赤いボールは赤血球。酸素の多い空気は肺から赤血球に取り込まれ、栄養と一緒に血管を通して体の隅々に運ばれます。体の隅々で酸素の多い空気は何をするのでしょうか。そして、『いきをするのはなぜだろう』の細胞が皮膚の先端に描かれているページ開き、「食べ物から吸い取った栄養分を、酸素で燃やしているのは一つ一つの細胞ですと、書かれています。では、栄養分を酸素の多い空気ですべて燃やしてなにを作り出しているのでしょうか」。

「…」どの子も何を答えているのか、糸口が探せない様子でいる。

「では、少し話題を変えましょう。自動車は何で走りますか」と、視点を振ってみる。

「エンジン」。「エンジンで？」。

「あっ。ガソリン」。「ガソリンを？」。

「燃やす？」。「ガソリンを燃やして？」。

「走る」。先ほどの続きを読む「目に見えないような小さな細胞が、手や足を動かしたり、考えたりするエネルギーを作り出しています。栄養を酸素の多い空気ですべて燃やしてエネルギーにして、考えたり走ったりしています。そして、酸素の使いかすが二酸化炭素というわけです。では、二酸化炭素を吸って酸素を出すものは？」。2人の子が手を挙げる。最初に手を挙げた子を指名する。

「植物」と答える。手を挙げていたもう一人の男の子が「植物が光合成を行って酸素にします」と、続けて発言する。

「ここを見てください」と、『からっぽだっていっぱい』の木の葉や海からブルーの空気が生み出されているページを示し、「葉っぱや水の中からも酸素が出ていますと書いてあります。では、水の入ったコップを太陽の光が当たるところに置いておきます。酸素を出すのでしょうか？」。

「はい、出します」。植物と発言した女の子が自信ありげに答える。

「そう思う人？」。6～7人の子が手を挙げる。このとき他の子の賛同を求めた意図は、正解に導かれたとき女の子を孤立させないためと、安心して発言できる場であることを認識させる配慮である。

『からっぽだっていっぱい』に描かれている海辺のページを見せ。「海の浅瀬には何が生えていますか」と問いかける。

「海藻」7人ほどの子が発言する。

「海藻が？」と問いかける。すると男の子が手を挙げて、「水の中に空気があるのですか」と、聞いた。この発言はテーマの追求の中で自ら気づいた疑問点である。対話的ブックトークの趣旨である考え付いたことや疑問に思うことがあったら、手を挙げて発言するという対話的ブックトーク本来の意図に当てはまる。

「いい質問ですね」と、彼の疑問をみんなで話し合う方向に導く。

「水の中に空気はあるのでしょうか」。「…」子どもたちはまた顔を見合わせてシーンとしてしまう。

「では、もう一冊の本で考えて見ましょう」と、『宇宙と地球と日本列島』を取り上げる。

「この本では、地球は50億年前に誕生したと書いてあります。そして、今からおよそ32億年前に地球に初めての生き物が現れました。それは藻類だったそうです。その頃の地球の大気の主成分は二酸化炭素でした。そのうえ、太陽から降り注いでいる生物にとって有害な紫外線を防ぐオゾン層もありませんでした。有害な紫外線から身を守るために最初の生物である藻類は、太陽の光が届く海面から10メートルから15メートルの水中で光合成をおこないました。そして、大気中の酸素の量が増え

ると、上空にオゾン層が作られました」。ここまで読み進めたとき男の子が手を挙げ、「どうして、最初の生き物が魚ではないのですか？」と、疑問を投げかけてきた。

「いい疑問ですね」。この発言は多くの子が持った疑問のように思われた。そこで、この疑問を解く方向で話を進めることにした。

このような話の広がり活発に進むことの中に対話的ブックトークの意図がある。

「どうしてでしょうね〜。はい、貴女」女の子が手を挙げる。

「二酸化炭素の多い大気だったから、植物が光合成をおこなって酸素の多い大気にしてからでないと動物は生きられないから」。「それは、海の水に含まれている空気も、ということでもいいですか？」

「はい」。「そうだと思う人？」大半の子が手を挙げる。

この意見を言った女の子は、先ほどコップを窓辺において置いたら水から酸素は生まれるかとの問いかけに「生まれる」と答えた子だった。

「植物である藻類が水の中で光合成をおこなって、水中や空中の酸素を増やしていった。そして、オゾン層ができ、今から4億年前に生物が陸上に進出することができたと、この本に書いてあります。さて、コップの水は酸素を出すのでしょうか？」

「出ませ〜ん」男の子が楽しげに言った。この時授業終了のチャイムが鳴った。

「時間が来てしまいました。この後は、動物は酸素がないと生きられない。それは細胞の一つ一つで栄養を酸素で燃やしてエネルギーを作り出して、生きているのだということや、水中の二酸化炭素の問題も含めて、空気の不思議について皆さんで話を深めてくださいね」と、授業後の子ども達どうしの話し合いにテーマの追求を委ねて終了した。

3〜4年生には難しい内容の話し合いが成立するのも、絵本と言う媒体が可能にさせる。知識の分野を扱う対話的ブックトークにおいては、専門家による解かりやすい文体と適切な絵の補足が子ども達の考えを深める大きな力となる。

決められた時間での対話的ブックトークでは、話し合いが途中で終了してしまうことがあるが、この状態で終了することは子ども達どうしで問題解決に向かう好機を作ることになる。

* この授業においての話し合いは大変充実した内容で進んでいる。しかし発言している子は6人前後の子に限られ、ほとんどの子は傍聴しているだけであった。3〜4年生から始まる、聞いているだけで発言しない状況が見えてくる。

(3) 5・6年生での実践例 テーマ「信頼」

【テーマの意図】

生きていくために欠かせない人間関係の原点を見つめなおしてみよう。



図11.『王さまと九人のきょうだい』



図12『ギルガメシュ王ものがたり』

扱った絵本

- 1、『王さまと九人のきょうだい』 岩波書店
- 2、『ギルガメシュ王ものがたり』 岩波書店

3、『ぼくはくまのまままでいたかったのに…』
ほる出版

4、『ヴァイオリン』 評論社



最初に『王さまと九人のきょうだい』と『ギルガメシュ王ものがたり』のあらすじを紹介し、この2冊の物語で話し合うテーマが「信頼関係」であることを伝える。

「国の最高権威者である王という存在でありながら、この絵本に登場する二人の王はどうしてこんなにも怖がりやだったのでしょうか。」

「…。怖かったから、不安だったから、九人の兄弟を次から次へ殺そうとしたし、ギルガメシュは城壁を高くして、敵が攻めにくい城にしたんですよね。」

「…。物語には描かれてはいませんが、城の中には大勢の家来がいるはずですよ。」

「…。専門の役割を持った人たちが、例えば、軍隊や家臣たちなどが…。」

「…。王さまはなぜ家臣に相談しなかったのでしょうか。一人で悩み苦しんだのでしょうか。」

「…。家臣を信頼していなかったのでしょうか。」

一人の男の子が手を上げずに小さな声で話します。

「その人が自分より人気が出ることを恐れたから」。この授業での初めての発言である。

「それは、人気のある家臣に王座を奪われる心配。ということですか」。黙って頷く。

その発言に続いて、ほかの男の子が、「王さまは兄弟が9人いると思っていなくて、超能力者だと思っていたんじゃないかと思う。「9人とも姿形が同じだから、入れ替わり来ていることを知らなかったということですか」。黙って頷く。

「兄弟の家に行っている家来はなぜ、兄弟は九人いることを王さまに伝えないのでしょうかね。」

「王さまが聞かないから」。「絵本を見ているあなた方には九人いるということがわかるけれど、王さまは兄弟が入れ替わっていることを教えられなければわからないから、超能力を持った一人だと思うかもしれないわね。また、黙って頷く。

女の子たちの多くは真剣にかかわっている様子がない。しかし、ぼんやりしているわけでもない。絵本に視線を合わせて話の進行に耳を立てているが、話し合いには参加してこない。

女の子たちに視線を向けて「まだ一度も手を挙げていない人、手を挙げてくれませんか」と、促すと、数人の女の子がとっさに頭を下げて視線をそらす。

「もう一度聞きます。家来はなぜ王さまに兄弟が入れ替わっていることを伝えないのでしょうか」

「聞かれないから」。

「では、聞きますが、あなた方もクラスメイトが次の授業を勘違いして違う授業の支度をしていても教えてあげないですか」。

「見てないし」。この返事にはどう応じていいかとっさに言葉が浮かばなかった。

自分以外には関心がないということか。

休憩時間にふざけ合う相手とクラスの仲間の双方に、仲間意識としてのつながり合う気持ちが成立して

図 13 『ぼくはくまのまままでいたかったのに…』

図 14 『ヴァイオリン』

いないということだろうか。見ていないということは気にしていないということなのか、それとも五感が働いていないということだろうか。

45分の授業内で子ども達がかかわり始めたのは30分を過ぎた頃からである。どのように自分の考えを整えたらいいのか。自分が言わなくても誰かが言うと思っているのか。このような状況で毎回授業が終了する。

「次回はどのようなテーマで話したいですか」

一度も発言しなかった男の子が「面白いこと」と、下を向いたまま言った。

「どんなテーマが面白くなりますか」。「…」。返事はない。

「貴方にとって、面白いことってどんなことでしょう」。「…」。意思表示がない。考えがまとまらないのか、真剣に話し合うことがつまらないのか。彼の意図がつかめないうま時間過ぎる。

「では、私の考える面白いテーマを用意してきます。」と、授業を終了する。

高学年の実践記録を読む限り何も問題はないように思えるが、発言している子どもは常に4～5人の子に限られている。女の子になぜ手を上げないのかと聞いてみると、目立ちたくないからとの返事が返ってきた。女子においては発言しない理由に、この年齢期特有の人間関係の複雑さもあるようだ。

幼稚園では、4～5割ほどの子が手を挙げる。担任の援助によることも大きい。

小学1～2年生では、3割以上の子が手を挙げて自分の考えが発言できる。

小学3～4年生では、2割ほどになってしまう。

小学5～6年生になると、さらに少なくなり1割前後になる。

テーマにもよるが、それだけではなく学年が上がるにつれて、手を挙げて発言する子が少なくなる状況は、どの学校でも同じように現れる現象である。

V、結果と考察

以上のように対話的ブックトークの実践から引き出された結果には、幼児期から小生の低学年時期に対話的ブックトークに親しませ、話し合う楽しさを味わう必要があると考えられる。なぜならばその時期に言葉の意味や言葉の使い方など、話し方の基本を培うことができるからである。

しかし、それぞれ紙芝居やストーリーテリング、絵本の読み聞かせなどから子どもの持つ潜在的な理解能力を引き出すには、子ども自身が話の内容が理解できるという前提条件がある。前提条件には意味が理解できている言葉を多く把握していることが不可欠であり、そのために子どもには周りの大人が体験を通して多くの言葉を習得させておく必要がある。

物語の内容を把握し理解するためには意味のわかっている言葉を多く持っている必要がある。そのためには、乳幼児期に十分な会話の体験や読み聞かせの中で多くの語彙を取得し、そのうえで対話的ブックトークから考えながら話す力を育む。さらに、対話的ブックトークは話し方の訓練となり、コミュニケーション力の基礎を培うこととなる。同時に、対話的ブックトークはそれぞれの子どもが自らの理解能力を限界まで伸ばす柔軟な対応が可能であり、加えて、知的好奇心に働きかけて科学する目を育むこととなる。

尚、上記の実践での発言の記述を見る限り、子ども達の発言力に問題は見られないように思われる。しかしこのデータには大きな見落としがある。発言者が限られた一握りの子どもに限られている点である。問題は1クラス35人前後の人数の中で常に発言するのは2割前後だという点である。

8割の子どもが途中から考えることをあきらめてしまったり、無関心であったりする。その傾向は3～4年生をボーダーとして年齢が上がるにつれて如実に表れる。なぜ考えることをあきらめてしまうのか、集中力を持続させるために興味のあるテーマの設定をわかりやすく、さらに楽しめる絵本による導きが必要である。対話的ブックトークを実践するに当たって、子ども達の発達心理や理解力を十分に見極めておくことが肝心である。興味のない分野や難解なレベルにてテーマ設定をするとつまらなくなってしまう。イコール考えることをあきらめてしまう要因となる。

視覚文化の中で生まれ育った現代の子ども達は、言葉による丁寧な働きかけを十分に受けないまま幼児期を迎えている。乳児期に周りの大人から十分に話しかけられていない子どもは、言葉の習得が希薄になっている。言葉の意味が理解できていなければ、会話内容も文章の意味も把握することはできない。幼児期の希薄な語彙力の中でかわすコミュニケーションは、話す側も聞く側も十分に意をくみ取らないまま会話を成立させ、伝わったつもり解ったつもりという表面的な会話力のまま小学校に入学する現状が窺われる。

小学3～4年生頃から現れる話さない現状の解決には、それ以前の年齢期に言葉の意味を問いただすことのできる状況を復活させ、子どもの言葉による働きかけに応じる日常を取り戻す必要がある。親が我が子を理解し子どもの不安を取り除き、子どもが「お母さん。聞いて、聞いて」と安心して話せる状況を用意する。子どもは家庭でのコミュニケーションの中で、言葉の使い方を習得し語彙量を増やしていく。さらに、授業における対話的ブックトークにおいて、子どもは聞く力・考える力・言葉を整えて話す力を育み、集団生活の中でのコミュニケーション力を育む。

よって3～4年生から現れる「話さない」現状を解決する策は、言葉の育みにあると考える。

- 1、 幼稚園・保育園期における自由性の中で身につけた会話力は、小学校に入学すると椅子に座って教師から一方的に話される説明を聞き、質問に答えるという環境に変わる。帰宅後も親からの指示に従い、お稽古事やスポーツクラブや塾においても大人からの指示に従って時間を過ごす。それらの環境以外の場で自分の意見や考えを話し合う機会が少ないのではなからうか。よって、自分の話している内容が相手に伝わっているつもり、相手の意図が理解できているつもりという、友達間でのあやふやな会話のやり取りのまま年を重ねていくことになる。

小学1年生の「対話的ブックトーク」において確認できるように、子ども達の発言は名詞と動詞のみによる発言が目立つ。いわゆる自分の気持ちや考えを言葉に置き換えて表現できないのである。

0・1・2才の時期に丁寧な話し掛けによって言葉を習得し、様々な分野の絵本の読み聞かせを体験し、子どもは知識を得、情感を育み、意志を培うものと考えられる。さらに読み聞かせてもらう中で子どもは字が読めるようになると興味のある本を読むようになり、読書を楽しむようになっていく。即ち、自分を自分で育てる読書本来の姿を獲得していくのである。

そのためには幼少年期における丁寧な言葉による対応は、子どもの理解力を育み、授業への積極的な参加を促すことにつながると思われる。

- 2、 3・4年生における語彙量と授業への参加態度の関係性については、入学当初には集団教育の中で許されるある程度の自由な発言を、2年生に進級するころにはルールに沿った話し方での発言を意識するようになっていく。さらにTPOをわきまえながら会話を交わすことを学び、発言への思考が始まる。そこで子どもは「このような言い方でいいのだろうか」という発言の躊躇が起り始める。帰宅

後もお稽古事や塾やスポーツクラブといった大人の指導下に置かれ、見たことや考えたことを子ども同士や大人と話し合うチャンスの場は少ない。

授業中に発言しなかった子が帰ろうとするコーディネーターを追いかけてきて考えを伝えに来ることがある。どうして授業中に手を挙げて発言しなかったのかと問いただすと、「目立ちたくないから」と言う。これは筆者がかかわっている学校だけの問題ではないと思う。目立ちたくないからという言葉の奥に「いじめ」や「いやがらせ」の問題があるように感じる。

3・4年生に現れる「話さない」現状を乗り越えるためには、子どものおかれた環境を整え、問題を理解したうえで、間違ふことは恥ずかしいことではないという安心感を与え発言する勇気を育むプログラムの整備が必要である。

対話的ブックトークは、知的好奇心を育み、興味をもって科学する目を育て、発見の楽しさや知り、自ら学ぶ楽しさを身に付けていく。対話的ブックトークに親しませることで3・4年生に現れる「話さない」壁を乗り越えられるのではないかと考える。

- 3、 5・6年生における語彙力と発言力の関係性においては、意味を理解したうえでの言葉の育みは年齢を問わないと記した。この年齢期における語彙の育みには2種類の習得方法がある。一つ目は辞書を引いて習得する方法。この方法で身に付けた言葉は文章を理解するには何の不都合もない。しかし、もう一つの方法である体験を通して習得する、言葉の取得は字面だけではなく五感で言葉の意味を把握することとなる。例えば、咲き始めたばかりの花の匂いや色合いなどなかなか表現できない微妙なニュアンスなど言葉で表せなくても五感で把握できる。この二通りの言葉の獲得の違いは、知っていることと解っていることの違いとなって表れる。

乳幼児期からの育ちの有り様によって形成される言葉の問題がここにあると思われる。解っている言葉が増えると言うことは発言に自信が持てることにつながる。よって、言葉の発達と表現力のかかわりは大きく言葉の育みの重要性を対話的ブックトークから感じるのである。

Ⅶ、まとめ

3・4年生に現れる「話さない」現状は、子ども達が大人から指示されたことができたかどうか、それが評価の対象になっている。いわゆる言われたことができればよいのである。紙飛行機を長く飛ばす折り方の工夫など、自らの想いや考えを友達や大人に向かって発信するチャンスは少ない。親が聞きたいのは授業の内容が理解できているかどうかであり、子どもの成績の良し悪しが問題なのである。

0・1・2歳の乳幼児期に周りの大人からの話し掛けの乏しさは、子どもの身近なものに対する興味が育ちにくく、物に対して執着する気持ちが希薄になっていく。今、乳幼児期の子どもがおもちゃの取り合いをしないとの報告もある。子どもの物欲が薄らげば取り合いも起こらない。喧嘩にもならないということになる。喧嘩には強い意志とエネルギーが必要である。しかし、幼児期を迎え親への口答えも兄弟喧嘩もしない。もめごともしこさず静かな良い子。これでよいのだろうか。

語彙量の乏しさはそのまま思考力低下につながっていく。今、子ども達は体験を通した言葉を習得しないまま、大人からの指示に従っている環境にある。子どもが子どもである内に育てなければならぬコミュニケーション力の育みの場がすでに落魄しつつある。

さらに今、親の世代がすでに豊かな言語を習得せず育った世代である。親自身が子どもの言葉の育み

が方が分からず、子どもを自分の意見も聞かず、意思を尊重しないまま、親の思い通りに従わせる傾向がある。

子ども達がどのような時代に生きていくことになるうとも、その時代を良識ある大人として生きるために、乳幼児期の子どもの理解能力を育むことは普遍的なテーマである。

乳幼児は五感で意味を把握した言語を多く習得することによって周りの大人の会話がより豊かに理解できるようになる。さらに絵本を読んでもらう体験から、登場人物の価値観を追体験することによって、主題を自分の問題として取り込む力をつけいくこととなる。その過程は理解能力の発達に沿った読み聞かせによって、身の回りで起る出来事や人間関係を理解できるようになり、加えて、主題の持つ道徳観や物事の善悪などを学び取ることとなる。絵本の読み聞かせからの間接体験は直接自分の行動や言動を指摘されるのではなく、物語に込められた教訓を冷静に受け止め、呑みこみやすい状況をつくる。

子どもは物語絵本の分野から精神文化を、知識絵本の分野から自然や社会の成り立ちを学び、さらには、絵本は親自身の子育てのマニュアルとしても活用出来る。乳児にとって母親の膝で揺れながら絵本に親しむ環境は、絵本への好奇心を育む効果のみではなく、乳児にとってかけがえのない幸せな時間の提供となる。このかわり方は親子の絆を深め、満たされた時間の中で乳幼児の理解能力は育まれていく。

親にとっても対話的ブックトークにおける親子の会話から、我が子の理解能力の発育過程の表出の確認は子育ての重圧を喜びに向かわせ、豊かな親子の関係性を育む相乗効果を生む。

以上のように対話的ブックトークは、知的好奇心を深め自ら学ぶ楽しさを身につけていく。このことは子どもの自己有能感を育み、さらに、絵本の読み聞かせによる発展性と継続性の中で、豊富な知識と豊かな基礎人格を身につけていくこととなるのである。

よって、幼児期からの対話的ブックトークの手法は、集団教育の場においても家庭教育においても子どもの「話す力」を培う教育手段として効果がある。

Ⅶ 今後の課題

2年生頃から徐々に表れる「話さない」状況をどのように克服していったらよいのか。

本研究において明らかになったように、

- 1)、0・1・2歳期における語彙の育み。
- 2)、3・4・5歳における読み聞かせによる理解脳と知的好奇心の育み。
- 3)、6・7・8歳期における読解力の育み。
- 4)、9歳以降の自分で自分を育てる読書への発展性。

以上のように継続的に発達段階に沿った言葉の育みと、読書への導きが、子どもの聞く力・考える力・発言する力を育む基本となる。

本実践から導き出した結果によって子どもの聞く力・考える力・発言する力を育むには、幼稚園・保育園などの乳幼児期から子どもに寄り添う保育者が「対話的ブックトーク」の目的を把握し、絵本を媒介として話しかける実践に期待するものである。乳幼児期から小学生低学年までの教育課程において、考える教育を心がけるところに、子どもたち自身が9歳の壁を乗り越える力を身に付けて行くと考え。

子ども達は今、知識は豊富に持っているが、頭で解っているだけで、体験の積み重ねによって培われた情報を活用し、自らの思考力を駆使して判断し、行動に移す力には至っていないと思われる。情報を精査し、必要な情報を駆使して自らの考えを導きだし、判断しよりよい結果へと自らを導く力を身に付けてい

くであろう。

絵本を活用した対話的ブックトークに親しむ環境をどのように広めるかが課題である。さらに、高学年の女の子の「目立ちたくない」思いは何時のころからどのように起こり始めているのかも調べてみる必要がある。

これから生きる子どもの時代がどのような社会になるかは想像もつかないが、新たな社会の中での良識ある社会規範を若い人たちと共に考えていきたい。

引用文献

- (図1) デイビッド・シャノン (作) 小川仁央 (訳) 2001 『デイビッドがっこうへいく』評論社
- (図2) デイビッド・シャノン (作) 小川仁央 (訳) 2004 『デイビッドがやっちゃった』評論社
- (図3) かこ さとし (作) 1977 『ほねは おれます いただけます』童心社
- (図4) 海野和男 (作) 1993 『虫のかくれんぼ』福音館書店
- (図5) 小林まさこ (作) 今井弓子 (絵) 1989 『なみだくんありがとう』あかね書房
- (図6) 渡辺政隆 (監修) 1997 『くらべる図鑑 6 知らせる』フレーベル館
- (図7) 越智典子 (文) 倉島千賀子 (絵) 1990 『からっぽだっていっぱい』農文協
- (図8) かこ さとし (作) 1977 『あかしろあおいち』童心社
- (図9) 藤森弘 (構成・文) 浅野りじ (絵) 1996 『いきをするのはなぜだろう』偕成社
- (図10) 竹内 均 (文) 北爪 薫 (絵) 1985 『宇宙と地球と日本列島』教育者
- (図11) 君島久子 (訳) 赤羽末吉 (絵) 1969 『王さまと九人のきょうだい』岩波書店
- (図12) ルドミラ・ゼーマン (文・絵) 松野正子 (訳) 1993
『ギルガメシュ王ものがたり』岩波書店
- (図13) イエルク・シュタイナー (文) イエルク・ミュラー (絵) 大島かおり (訳)
1978 『ぼくは くまのままで いたかったのに……』ほるぷ出版
- (図14) R・T・アレン (文) G・バスティック (写真) 藤原義久・千鶴子 (訳)
1976 『ヴァイオリン』評論社

(名古屋経営短期大学子ども学科 非常勤講師)